

今の時代における大学の役目
～歴史からみる教養の意義～

香川大学法学部

05J067 志宇知 純季

○序

大学全入時代、法人化による大学財政の危機、ゆとり教育の余波を受けての学生の質の低下など、我が国の大学は今、岐路に立たされている。そんな中で、大学の教育的使命をいかなる目標の下に具体化するかは、教授陣だけの問題ではなく、学生にとっても大きな関心事であり、国民全体が注意深くその過程を見守らなければならない事柄である。

旧態依然たる学歴社会の壁は厚く、地方大学や弱小私立は財政逼迫の名の下に教養教育の時間を削り、安易な職業訓練に熱心になりつつある。だが本来、大学の役割はもっと別のところにあったはずである。大学はどこへ向かうのか。「大卒」が意味していたところを今一度、考えなおす時が来ている。いまこそ大学がその原点に立ち返る時なのではないだろうか。

本稿では、大学教育の草創期に、どのような人間像が目指されたのかを述べ、歴史が現代に何を問いかけているのかを考察していく。

○大学と教養

(1)初期大学とアカデミックスキル

「大学 Universitas」が現在に直結するような体裁を整えたのは、十二世紀末の西ヨーロッパであった（ラシュドール、1966）。そのころの西ヨーロッパは、古代ローマ帝国の崩壊以降、知的活動が停滞していた。それが、自治都市の発展による地中海貿易の活発化や、度重なる十字軍の遠征などの影響で、東西の交流が再開されると、当時のビザンツ帝国やイスラム世界で保管されていたプラトンやアリストテレスの著作が（アラビアの科学者・哲学者らによって注釈・増補されて）西ヨーロッパにもたらされ、「再発見」された。これを機に十二世紀ルネサンス¹と呼ばれる大々的な知的復興がなされ、その所産として誕生したのが「大学」だったのである。その中で特に「オリジナルの大学」の一つ²として他の大学の模範とされたものは、北イタリアの都市ボローニャにあった。

ボローニャの街は、ミラノやヴェネチア、フィレンツェをつなぐ東西南北の交差点に位置する西ヨーロッパの交通の要衝で、ロンバルディア同盟³の一員であり、古代ローマ帝国の名残である公証人養成所が存在した（ラシュドール、1966）。イルネリウスらによる古代

¹ 中世ヨーロッパにおける知的復興で、「暗黒の時代」と称されていた中世は知的な活気を帯びるようになり、後のイタリア・ルネサンスへと、断続的に文芸復興がなされている、とハスキンスは提唱している。（ハスキンス『十二世紀ルネサンス』序言参照）

² ヴェルジェは『中世の大学』の中で、オリジナルの大学としてボローニャ大学とパリ大学を挙げている。パリ大学は、その成立過程をボローニャと異にし、その主体はあくまで教師の組合であった。これは、比較的裕福な学生が集まったボローニャと違って、パリの神学校に集まったのは貧しい家庭の子弟であつたりしたためである。

³ 北部イタリア、ロンバルディア地方の諸都市がヴェネチアを中心として、神聖ローマ皇帝の支配に対抗するために結成した軍事同盟。後に経済的な同盟の性格を帯びるようになった。

ローマ法の注釈が行われるようになると、街の名声は一気に西ヨーロッパ全域に広まり、交通の利便性も相まって、各地から言語や民族、階級などの隔てなく学生が集まり（松川、1978）、共同生活が始まった。当時の大学はまことに国際性に富んだ共同体だったのである（リーゼンフーバー、1987）。彼らは自分たちで教師を雇い、教師の自宅や教会の礼拝堂で、時には広場の片隅で学んだ。街の住人から見れば外国人である彼らは、自分たちの権益を守るために組合をつくり⁴、土地の権威である司教や、都市の行政支配に対抗した。ここに、純粹に学問を追い求める抽象的な連合体たる「大学」が成立したのである⁵。

注目すべきは、その教育内容である。中世の大学では、法律や神学といった上級の学科で学ぶ以前に教養諸科の修得を要した。中世ヨーロッパにおける「教養」とは、古代ギリシアで自由民⁶が身につけるべき素養とされていた諸学問である。すなわち、正しい文章を綴るための「ラテン語文法学⁷」、論理的思考のための「論理学」、流麗な文章を書き説得力を持たせるための「修辞学⁸」、そして、当時の最先端知識であった「算術」、「幾何学」、「天文学」、さらに文化的素養の「音楽」を加えた七つが、自由学芸またはリベラルアーツと呼ばれる教養的学問である（飯、2003）。その思想は中世ヨーロッパにも受け継がれることとなり、法学や神学のスペシャリストには、教養を身に着けたジェネラリストでなくして為りえなかったのである。しかしそれも当然で、聖職者は布教に際して聖書の言葉を文字の読めない民衆に弁舌をもって伝える必要があったし、法律家にも訴訟において論理的な整合性と巧みな話術とで判事・陪審を説得する技術が要求された。教養の中で最初にあげた三学問が、どれほどの重要性をもった技術的な教育であったかは想像に難くない。

その点に鑑みて、現在の大学教育を観察してみれば、その根本的なところで問題を抱えているということに気づくのではないだろうか。大学で身につけるべき能力は、「読む」「書く」「聞く」「話す」ことであると一般的には言われている。つまりは、各種文献の理解読解、論文・レポートの構成、ゼミナール教育におけるプレゼンテーションといった、技術面での教育指導であり、それを通じて、社会における問題解決能力を養うことにある。

にもかかわらず、現在なされている教育は、各学部による縦割り教育と、安易な専門科目の重視によって、全学問的な教養教育と技術面での指導は、概して従属的な位置付けに

⁴ 大学を意味する語「Universitas」は本来「組合、ギルド」という意味であり、「教える者と教わる者の共同体」という意味が当てられるようになったのは、言語の恣意性による、まったくの偶然である（田中、2005）。中世の大学の構成は、学生組合と教師組合の他に、国民団もしくは同郷会（natio）と呼ばれる、同じ出身地の人間で構成する組合も存在し、大学の運営に大きな影響を及ぼした（北川、2005）。

⁵ これら「オリジナル」の大学は、のちに神聖ローマ皇帝やローマ教皇、国王などから認可を受けることで独立した共同体となり、中世ヨーロッパにおける新たな権力主体となった。これが「大学の自治」概念の起源である。また、本文中で「抽象的」と表現したのは、草創期の大学が固有の土地や施設を所有しておらず、概念上の存在であったからである。

⁶ 古代ギリシアの都市国家ポリスにおいて、奴隷ではない者。

⁷ 古代ギリシアにおいては当然ギリシア語の文法学である。尚、中世の大学における入学資格は、最低限のラテン語の読み書きであった。

⁸ この「修辞学」には、文語だけでなく、弁論術・雄弁術といった口語の訓練も含まれる。

甘んじている。結果、学生はレポートの書き方も知らないままに課題を出され、プレゼンテーションも満足にできないままゼミに臨んでいるのである。専門科目の重視は耳に心地よく、大学経営にとって対外的なアピールになる。しかし、それは総じて表面的なものにしか過ぎず、出来上がるのは了見の狭い人間である。教養なくして専門的事象を語ることはできない。なにしろ、語るに必要十分な語彙と技術とを、学生は持ち合わせていないのだから。

(2)今日の教養

では、現代社会における「教養」とは何であるのか。中世の「教養」とは、要約すれば、正確かつ高度な言語能力と当時の最先端知識であった。中世に大学が産声をあげてから千年近くを経た現在でも、思想の基礎である言語、とりわけ国語・母語の教育⁹が、いかに重要であるかは改めて言うまでもない。ここ最近もてはやされている英語教育は、語るべき人間の中身を形成した後に付随する二次的なツールであって、それ以上のものではない。また、現代社会はグローバル化と相互依存の驚くべき進展によって、国際社会においては国境の意味合いが薄れ、国内社会においては情報が洪水の如く氾濫している(ナイ、2003)。統一的なアイデンティティーであったローマ帝国の消滅で混沌としていた中世ヨーロッパ以上に、現代社会は混沌としている。マスメディアから流されてくる膨大な情報から、正確なものを的確に判断するだけの見識が、市民には必要である。それは豊かな教養に裏付けられてこそなせることで、その広い見識を与える役目は大学にある。現代に生きる市民に必要な教養とは、社会の中で、自らのイデオロギーを明確にし、それを周囲に発信する素養である。それはディベートで相手を打ち負かすこととは全く異なる。広い視野をもって国際社会に対する造詣を深め、祖国と郷土への理解を通じ、多様な価値観をもつ複数の他者との間にコンセンサスを形成させることである。言葉と知識とによる、問題解決の能力である。国際社会人は教養なくして存在し得ず、ために大学が担う役割は重大である。

いま我が国は大学全入時代に突入しつつあり、大学経営は受難の時を迎える。だが、これを逆に捉えれば、大衆化した大学が、大衆を多くの知的市民へと育成することで、社会の知的クオリティーの向上を図る絶好のチャンスであると言える。現代の大学人に求められるのは、高度に専門特化された研究論文だけではなく、教育者たる自覚と純粋に真理を追い求める姿勢、そして、種々の学問に相互の連関を見出し、それを惜しみなく学生に教授する真摯な態度である。学生が学ぶべきは、まるで地球を覆う大気圏の如く、広範であり、それでいて一定の厚みをもった体系的な教養である。諸学問の関連が理解できるようになれば、学生にとっても講義を受ける上での励みとなり、理解力が向上する。哲学が始まるのである。それがあってこそ、国際社会の中で民主的市民・自律的個人としてのアイ

⁹ もちろん母語の教育は高等教育の前段階からの連続的な教育であり、大学のみがその責務を負うというわけではない。大学で行うべきは論理的・抽象的な思考力や、文章の構成力を養うことである。

デンティティーが確立され、同時に祖国・郷土・地域に対する貢献意欲も育むことができるのではないだろうか。

〇おわりに

大学の本質は研究機関ではなく教育機関であった。中世においては、当時の権力である帝国や教会にとって必要な人材を、大学が育成した。それは法律の専門家であり、聖書を十分に理解した聖職者であり、最先端のアラビア医学を修めた医師であった。だが、彼らは単純に各分野の専門家というだけではなく、その素地としての教養を身につけていた。大学で学位を得た者は、さながら一昔前まで我が国で言われていた「学士様」のように、尊敬と羨望の的であった。

市民社会論の文脈の中に熟議民主主義（討議デモクラシー）という議論がある（篠原、2004）。民主主義社会における市民の役割を強調し、市民が積極的に意見をたたかわせることで、政治の活性化を図ろうというものである。民主政治とは、非常に労力を要する政治形態である。市民の一人ひとりが自分の価値観に従って行動し、結果としての多数に全体が従うものであるが、それには判断基準となる知識が必要であるし、これはともすれば大衆扇動的な政治に陥る危険性を内在している。市民に考える材料を与え、正しい道を指し示す先達の役目も、学問の府たる大学が負うところである。

大学は真理を追究することで人類の英知を発展させる重要な役割を担っている。そしてそれ以上に、地域に根ざし、そこに民主的市民を送り出すことを責務としている¹⁰。それは何も「即戦力」と言われるような単なる専門家ではない。中世ヨーロッパにおける専門家がそうであったように、現代に生きる専門家たちにも、地域社会での「よろず相談承り」のような人間像を当てはめられるようになれば、と思う。

大学は、専門学校ではない。故に、大学に通い身につけるべき知識は、専門学校のそれと同じであってはならない。大学だからこそできることとは何か。それは、一見何の繋がりもない諸事象に相互の連関のあることを理解し、物事の全体像を総合的に把握できる、真に民主的な人間を育成し、社会に送り出すことにある。それが地域への貢献となり、ひいては国家への貢献、さらには世界平和構築への足掛かりになると信じ、大学の理念が、教養教育の視点に立って再考され、本当の意味での「地域に根ざした大学」となることを願ってやまない。

¹⁰ 民主的市民の言説は、その多くを南原繁『文化と国家』に依拠している。南原の議論は、戦後の荒廃した祖国を立て直すには、民主的態度と市民的勇気をそなえた市民が必要で、その育成はひとえに大学の果たすところであるとしている。

参考文献

- *ヘースティングズ・ラシュドール[1966]『大学の起源：ヨーロッパ中世大学史』東洋館出版社（横尾壮英訳）
- *チャールズ・H・ハスキンス[1985]『十二世紀ルネサンス』創文社（野口洋二訳）
- *ジャック・ヴェルジェ[1979]『中世の大学』みすず書房（大高順雄訳）
- *松川成夫[1978]「大学の起源 ウニヴェルシタスとコレギウム」『海外事情』26（5）、拓殖大学海外事情研究所
- *クラウス・リーゼンフーバー他[1987]「中世の人間像と教育観」『ソフィア』36（1）上智大学
- *田中建彦[2005]「大学の起源と学問の自由」『長野県看護大学紀要』長野看護大学紀要委員会
- *北川朋子[2005]「現代における大学の役割：中世のパリ大学と現代日本の大学論」『人間学紀要』35、上智人間学会
- *飯謙[2003]「教育理念の再検討：リベラルアーツを中心に」『論集』50（1）、神戸女学院大学研究所
- *ジョセフ・S・ナイ・ジュニア[2003]『国際紛争：理論と歴史（原書第四版）』有斐閣（田中明彦・村田晃嗣訳）
- *篠原一[2004]『市民の政治学：討議デモクラシーとは何か』岩波新書
- *南原繁[2007]『文化と国家』東京大学出版会